

大井手堰

大井手堰は、岩島の内川、中庄の那東川へ水を引くために、1674(延宝2)年に藩命により佐藤良左衛門(初代)が修築した水門堰です。修築は難工事を極め、良左衛門はその娘お秀を人柱に立てようしますが、藩公からの使者がこれを止め、代わりに観世音を埋めたと伝えられています。今も水門の上には、鎮護の神として水神社が残されています。那賀川北岸地区では、大井手堰のほか、上広瀬堰、下広瀬堰から取水して約2,500町歩(約24.8km²)を灌漑していました。

ガマン堰

昔、岡川との分派口に小洪水は断ち、大洪水の一部は越流させる低い越水堤が1869(明治2)年に完成しました。それが、ガマン堰です。洪水の度に「ガマンせい」と慰め合い、補修工事は重労働を「ガマン」したことから、この名がつけられたと言われています。1943(昭和18)年にガマン堰の縮切が完了し那賀川と岡川は完全に分離されました。

岡田式渡船

1916(大正5)年、阿南鉄道が開通し、古庄がその終点となりました。そのため、那賀川を隔てて南北の交通がますます頻繁になり、昔ながらの渡船が登場しました。これが考案された渡船方法です。古ヤーロープを張り、滑車を取っつけ、水の流れる力を利用して、これよってかなりの増水時になりました。

水神さん(古庄)

那賀川沿川には、数多くの水神さんがあります。水神さんは、水速女命が祭神であり、水難事故防止や堤防が壊れないようにとの祈りから水神さんを祀っています。現在でも、まつりや花火大会など地域に密着した形で目にすることができます。

辰巳新田

辰巳は那賀川と桑野川の合流点に位置した三角州として形成された土地です。この土地の新田開発を最初に手掛けたのは横見町の新兵衛でした。1835(天保6)年に開発を始めましたが資金不足に陥り、1843(天保14)年に小松島の豪商鹿屋屋(井上家)に権利を譲渡し、明治時代まで開発が行なわれました。その後、1970(昭和45)年頃に辰巳地区に工業開発するため全戸が移転し、現在では約120haの工業団地に姿を変容しています。



野神さん(野神社)

昔、那賀川は再三にわたり堤防が決壊し、大洪水になり、困り果てた村人たちは、人柱を立てることにしました。相談の上、朝一番に堤防を通った女の人を人柱に立てることにしました。何も知らない女のお通路さんが通りかかり、無理やり人柱にされました。1949(昭和24)年に黒土堤の堤敷に那賀川南岸用水を作っている時、掘り起こした土砂の中から人骨が出てきて、言い伝えられていた人柱の話が本当であることがわかりました。その人骨を祀り犠牲者の冥福を祈ったのが野神社です。現在も“野神さん”として親しまれています。



万代堤と古毛の大岩

万代堤は、古毛村の庄屋、吉田宅兵衛充隆(3代目)が、1788(天明8)年に藩の命令により、私財を投じて工事に着手して以来、1872(明治5)年まで十数回にわたって改修されました。その規模は、長さ約1,070m、敷幅約44m、高さ約7m、天端幅約7mで、当時としては本格的な堤防でした。万代堤は、毎年のように洪水によって破損することから、水はね効果を期待し、硯石山から落とし入れた巨岩は、“古毛の大岩”として、今も残っています(長さ約9m、幅約7m、周囲約23m)。毎年7月には、万代まつりが開催され、吉田宅兵衛らの先人の偉業に感謝し、苦勞をしのいでいます。



那賀川橋

那賀川で最初の抜水橋として、1928(昭和3)年にトラス式で全長236m。その後、那賀川の改修事業で右岸側を引堤することとなり、橋梁の南端に接続して、5径間のコンクリート橋101mを継ぎ足し、1942(昭和17)年完成しました。現在は、全長337mです。



富岡水門

1929(昭和4)年から国の直轄事業として行なわれてきた那賀川改修工事として、那賀川と桑野川を分離させるため、1952(昭和27)年に富岡水門が完成しました。富岡水門による縮切により、桑野川の洪水被害は軽減されました。現在の富岡水門は平成2年に改築されたものです。



齊藤島

齊藤島は、那賀川河口部のほぼ中央に浮かんでいた島で、上下流方向に約1km、最下流端で幅約350mの長三角形の広大な中島であり、人家が約10戸ある原野でした。那賀川改修計画により撤去されることとなり、1937(昭和12)年から掘削がはじまり、1940(昭和15)年に完了しました。那賀川で初めて機関車を導入し、掘削土砂は、横見・芥原堤防の築堤材料として使われました。掘削面は、平常水位程度に留め、それ以下の部分については洪水により自然に掘られる方法がとられたようです。現在、島の一部分が水面から出ているところに名残が見えます。

